

研究・調査プロジェクト報告

創価学会新潟新佐渡会館建設の調査報告

小瀬修達

調査日時 平成二十三年九月～二十四年一二月

調査場所 新潟県佐渡市八幡地区（創価学会新佐渡会館周辺）

調査内容 創価学会新佐渡会館建設地の概要調査を通して、創価学会が会館をこの地に建てる目的、用地の取得方法、

完成に至る経緯等を検証する事で、創価学会会館の成立手段を把握する。上記調査に基づき、顕正会が建設予告している佐渡会館への対応策を考える。

新潟県内の顕正会会員数は、平成二十三年末現在で公称「一二万五千人」、四十七都道府県の中では五位であると云う。平成一七年、顕正会浅井昭衛会長は、「新潟三十万弘通の暁の佐渡会館と塚原記念碑建立」を宣言し、以降、県内の顕正会会員は、これを目標に盛んな勧誘活動を行い、逮捕者を出す事件等を引き起こし、社会問題化している。

調査員 小瀬修達研究員

## 序

新潟県佐渡市八幡字辰巳一八五一番一・二〇五九番一の土地に、昨年（平成二三年）一〇月より創価学会が新潟新佐渡文化会館の建設を始め、本年（平成二四年）一〇月完成の予定である。

平成二三年八月三一日付の『聖教新聞』に新佐渡文化会館について以下の記事が掲載された。

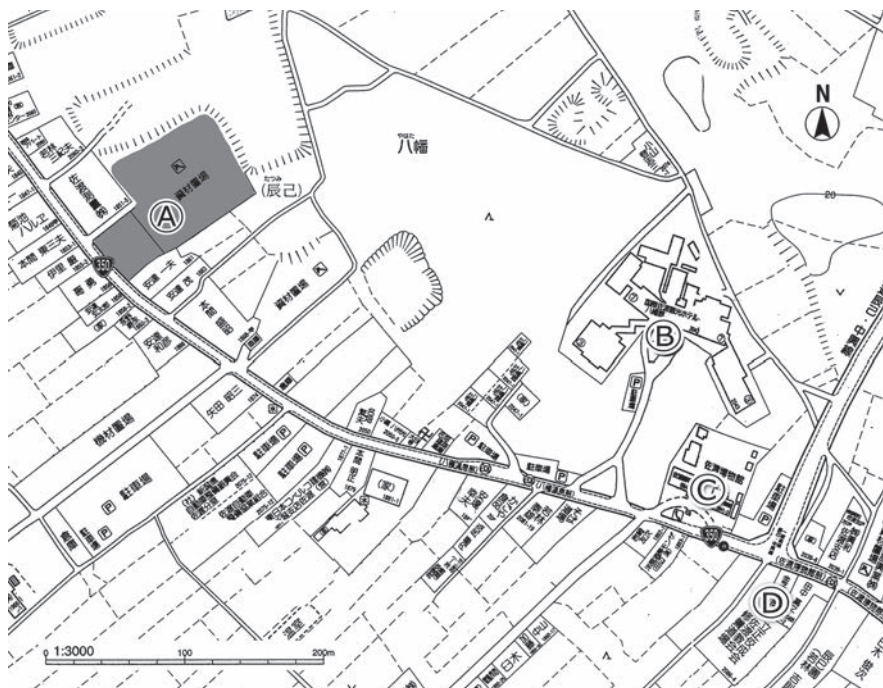


『日蓮大聖人有縁の地・新潟県佐渡市内には、新「佐渡文化会館」の建設が決定した。二階建ての新会館は礼拝室、法話室、会議室などを備える。今秋着工し、明年秋の完成を目指す。昭和三三年七月、池田名誉会長（当時・総務）が佐渡を初訪問。大聖人が魂魄をとどめたこの地を最高の幸福島にしていくのが学会の使命』と語った。この師の期待を胸に、佐渡の友は、広布拡大と青年育成に邁進してきた。若林正道圏長、頓宮愛子同婦人部長は固く決意する。『世界は佐渡』との誇りも高く、一人一人が報恩の心で、新たな創価勝利の歴史を開きます！』

### 一、新・旧佐渡文化会館の位置（上図参照）

創価学会会館は日本全国に約一二〇〇ヶ所（平成二〇年現在）あり、新潟県下には二〇ヶ所の会館がある。佐渡市内には佐渡市上横山一〇〇八に①「佐渡文化会館」が国道三五〇号沿いにあり、両津港・佐渡空港に近い。今回の②「新佐渡文化会館」は真野湾側の佐渡市八幡字辰巳（一八五一番一・二〇五九番一）にあり、国道三五〇号沿いで近くに観光ホテル八幡館、佐渡博物館等がある。①②いづれも周囲に日蓮聖人霊蹟地はない。（聖人御救免の際、守護所を経由された為、近くを通られた可能性は低い。）





《佐渡市八幡地区周辺図》

- ① 創価学会新佐渡文化会館
- ② 国際佐渡観光ホテル八幡館
- ③ 佐渡博物館
- ④ 立正佼成会佐渡教会修養道場

※①～④間一帯は元松林の砂地である。八幡地区に日蓮聖人に関する霊蹟等はないが、①創価学会・②立正佼成会と各派島内最大規模の施設を建設した理由の一つとして、③観光ホテル八幡館（八幡二〇四三、定員四〇〇人）が近距離にある為と考えられる。研修会等を会館で行う場合、八幡館に宿泊し短時間に往来できる利便性がある。①②間の距離は約四〇〇m程である。八幡館は六階最上階に皇室関係者宿泊用の貴賓室や特別室を備える格式ある旅館であり、会長・理事長クラスの宿泊が用意できる。また、一般者は一万円前後から宿泊できる。④財団法人佐渡博物館（八幡二〇四二）は島内の歴史文化等を広範囲に収集・展示する総合博物館で企画展示が可能である。



佐渡市八幡の新佐渡会館建設予定地（平成23年9月現在）

## 二、新佐渡会館建設予定地の概要調査（平成二十三年九月現在）

当建設予定地①は前図の通り（株）佐渡測量の隣に位置し、国道三五〇号より約三〇m程奥まった所に鉄製パネルの塀で仕切られ「開発許可標識」が掲げられている。標識の内容は以下の通りである。

「都市計画法に基づく開発許可標識」

開発許可年月及び番号 平成二十二年一〇月一五日 佐建第三二九九号

許可を受けた物（者）の氏名 創価学会代表役員 正木正明

工事施工者の氏名 近藤組・加賀田組建設共同企業体

開発区域の所在地 佐渡市八幡字辰巳一八五一番一、二〇五九番一

開発区域の面積 八五七九・二六㎡

工事予定期間 平成二十三年一〇月八日～平成二十四年一〇月二六日

【都市計画法に基づく開発許可標識】とは、佐渡市都市計画法に基づき、施主が市建設課に開発許可申請した内容を標識として現場に掲示したものである。

【開発許可年月及び番号】は、佐渡市建設課に提出した開発許可申請書の許可番号と日時であり、実際に『佐建第三二九九号』の開発登録簿（調書）を市建設課において閲覧・確認した。

[illegible]

表 1 中国の経済成長と人口増加			中国の人口増加	
年 間	人口増加率 (%)	人口増加数 (万人)	人口増加率 (%)	人口増加数 (万人)
1949年	2.2	100	2.2	100
1950年	2.2	100	2.2	100
1951年	2.2	100	2.2	100
1952年	2.2	100	2.2	100
1953年	2.2	100	2.2	100
1954年	2.2	100	2.2	100
1955年	2.2	100	2.2	100
1956年	2.2	100	2.2	100
1957年	2.2	100	2.2	100
1958年	2.2	100	2.2	100
1959年	2.2	100	2.2	100
1960年	2.2	100	2.2	100
1961年	2.2	100	2.2	100
1962年	2.2	100	2.2	100
1963年	2.2	100	2.2	100
1964年	2.2	100	2.2	100
1965年	2.2	100	2.2	100
1966年	2.2	100	2.2	100
1967年	2.2	100	2.2	100
1968年	2.2	100	2.2	100
1969年	2.2	100	2.2	100
1970年	2.2	100	2.2	100
1971年	2.2	100	2.2	100
1972年	2.2	100	2.2	100
1973年	2.2	100	2.2	100
1974年	2.2	100	2.2	100
1975年	2.2	100	2.2	100
1976年	2.2	100	2.2	100
1977年	2.2	100	2.2	100
1978年	2.2	100	2.2	100
1979年	2.2	100	2.2	100
1980年	2.2	100	2.2	100
1981年	2.2	100	2.2	100
1982年	2.2	100	2.2	100
1983年	2.2	100	2.2	100
1984年	2.2	100	2.2	100
1985年	2.2	100	2.2	100
1986年	2.2	100	2.2	100
1987年	2.2	100	2.2	100
1988年	2.2	100	2.2	100
1989年	2.2	100	2.2	100
1990年	2.2	100	2.2	100
1991年	2.2	100	2.2	100
1992年	2.2	100	2.2	100
1993年	2.2	100	2.2	100
1994年	2.2	100	2.2	100
1995年	2.2	100	2.2	100
1996年	2.2	100	2.2	100
1997年	2.2	100	2.2	100
1998年	2.2	100	2.2	100
1999年	2.2	100	2.2	100
2000年	2.2	100	2.2	100
2001年	2.2	100	2.2	100
2002年	2.2	100	2.2	100
2003年	2.2	100	2.2	100
2004年	2.2	100	2.2	100
2005年	2.2	100	2.2	100
2006年	2.2	100	2.2	100
2007年	2.2	100	2.2	100
2008年	2.2	100	2.2	100
2009年	2.2	100	2.2	100
2010年	2.2	100	2.2	100
2011年	2.2	100	2.2	100
2012年	2.2	100	2.2	100
2013年	2.2	100	2.2	100
2014年	2.2	100	2.2	100
2015年	2.2	100	2.2	100
2016年	2.2	100	2.2	100
2017年	2.2	100	2.2	100
2018年	2.2	100	2.2	100
2019年	2.2	100	2.2	100
2020年	2.2	100	2.2	100

姓名: 王德明 性别: 男 年龄: 45 民族: 汉族 籍贯: 湖南长沙 身份证号: 430101197805121234		单位: 长沙市发展和改革委员会 职务: 科长 联系电话: 0731-12345678	
本人因工作需要, 申请前往贵单位办理相关手续, 特此申请。		申请日期: 2023年10月27日	
申请人: 王德明 (签字)		单位领导: (签字)	
申请事由: 办理XX项目审批手续		审批意见: 同意	
备注: 请持此单前往XX处办理。		审批日期: 2023年10月27日	

『開發許可標識』と開發登録簿（調書）『佐建第三一九九号』を比較した結果以下の点が指摘できる。

「登録簿」にのみ記載のある項目として、「予定建築物等の用途：礼拝所」  
「自己の住居用、自己の業務用その他の別…自己の業務用」等がある。

『佐渡市八幡字辰巳一八五一番一』平成五年四月一六日、畑・原野（地目）を競売により（株）渡辺建設が購入、以降、合筆・分筆を繰り返し、平成三年二月一九日、雑種地に変更、平成三年四月二二日、一八五一番一を九二八<sup>㎡</sup>とする。平成二二年一〇月二九日、創価学会に売却（第四三〇五号）。

305

九日、雑種地に変更、平成二二年四月二二日、二〇九五番一を七六五〇㎡とする平成二二年一〇月二九日、創価学会に売却（第四三〇五号）。

※用地の売主である「株渡辺建設」は、当工事施工業者「近藤組」の関連企業（下請業者）である。このことから、創価学会が新会館建設地の取得を施工業者近藤組に依頼し、関連企業の渡辺建設が当所有地（資材置場）の地目「畑・原野・山林」を「雑種地」に変更して調達したとも考えられる。以前、島内で創価学会会館の建設反対運動が起きたことから、施工業者を通じた用地の取得を企てたものであろう。『開発許可標識』の「開発許可年月」が「平成二二年一〇月一五日」とあり、創価学会に売却した同年「一〇月二九日」よりも早くなっている。この点も用地の買収・会館の建設申請に間隔を空けない工夫とも見受けられる。

【開発区域の面積 八五七九・二六㎡】は、登記簿の『一八五一番一』（九二八㎡）と『二〇五九番一』（七六五〇㎡）を合計した面積（八五七八㎡）と略一致する。

#### 【創価学会 佐渡文化会館（旧館）】

佐渡市上横山一〇〇八の「佐渡文化会館」の登記簿謄本の内容は次の通りである。

『佐渡市上横山字西一〇〇八』雑種地（地目）を昭和六一年二月二五日創価学会が購入（第一〇八七号）、昭和六二年四月二一日境内地に変更。

※以上から「佐渡文化会館」は、昭和六二年に完成した様である。創価学会への売主名の記載はないが、昭和六一年発行の『佐渡住宅地図』では同土地に「石材置場」と記載されていることから、学会墓地で取引のある島内石材業者より購入した土地とも考えられる。八幡の新会館が完成した後、この旧会館の処遇については未定であると云う。（平成二三年現在）



佐渡文化会館（旧館）



【工事施工者の氏名 近藤組・加賀田組建設共同企業体】

(株)近藤組

本社 新潟県佐渡市相川大間町四五

代表取締役社長 近藤光雄：建設共同企業体代表者

資本金 二千万円

(株)加賀田組

本社 新潟県新潟市中央区八千代1丁目五番三二号

代表取締役社長 市村 稿

資本金 五億二千万円

【許可を受けた物（者）の氏名 創価学会代表役員 正木正明】

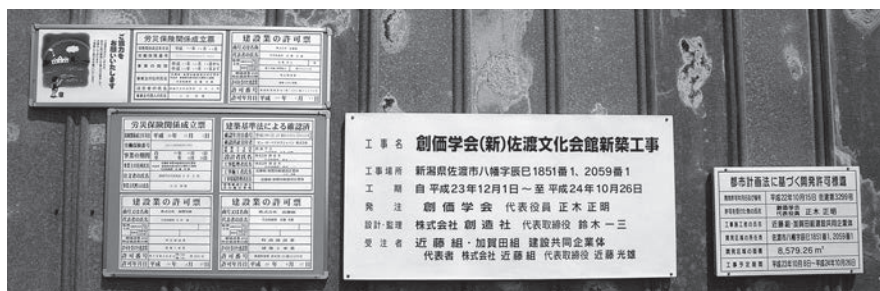
正木正明、第九代創価学会理事長（二〇〇六年一月より現職）、創価学会代表役員。

一九五四年生、大阪府堺市出身、創価大学法学部卒業、師範。草創期の創価学園、創価大学に学び、高等部長、男子部長、青年部長として人材育成に関る。東京総合長、関西総合長、創価学会教宣部長、創価学会インタナショナル副会長、創価大学理事、創友会総合委員長（創価大学卒業者の校友組織）、創価学園理事、広布新聞会議副議長などを歴任する。

※正木理事長（五八歳）は現時点での実質的最高権威者（第六代現会長は原田稔）。多説あるが、池田大作名誉会長（SGI会長）没後、長男池田博正副理事長（SGI副会長、一九五三年生、五九歳）がSGI会長に就任し、両者の体制が長期間継続すると推される。（平成二四年現在）



新佐渡会館の工事現場（平成24年4月15日現在）



現場に掲示された標識類

### 三、新佐渡会館工事の進行状況

（平成二四年四月一五日現在）

平成二三年一〇月一二日の起工式以降、工事は進み、平成二四年四月一五日現在、基礎工事を終え、上部の鉄筋・型枠組みが進行中である。

前述の『都市計画法に基づく開発許可標識』以外に、『労災保険関係成立票』（二枚）、『建設業の許可票』（三枚）、『建築基準法による確認済』、『創価学会(新)佐渡文化会館新築工事』の総合表示板が新に掲示され、設計業者が明らかとなった。

【設計・監理 株式会社 創造社

代表取締役 鈴木一三

(株)創造社

本社 東京都新宿区愛住町八・八

代表取締役 鈴木一三（一級建築士）

※創価学会の関連企業で創価学会施設の設計・監理全般を担当する。年商三六億円の内、約八割程が創価学会関連と云う。





新佐渡会館の工事現場（平成24年8月8日現在）



完成した新佐渡会館（創価学会 佐渡平和会館）

## 四、新佐渡会館（佐渡平和会館） の完成

平成二十四年二月二十六日、佐渡会館が完成し、開館式が行われた。二月二十八日付の『聖教新聞』に会館について以下の記事が掲載された。

『新潟 佐渡平和会館が誕生』

「佐渡平和会館」の開館式が二六日、新潟・佐渡市内で行われた。

日蓮大聖人有縁の地に立つ同会館。礼拝室、法話室等を備え、佐渡圏の中心会館となる。

式典では畑総新潟長が経過報告を。若林圏長、頓宮圏婦人部長は「世界が憧れる佐渡の誇りも高く、皆が地域の希望に」と力説。金子総信越長が励ました。』

※平成二五年二月一日時点でこの建物は未登記である。

創価学会では、既に「文化会館」が建設されている地域に、もう一つ会館を建設する場合

「平和会館」の名称を使用すると云う。佐渡市の場合、同市上横山にある「佐渡文化会館」の存続が決まった為、「新佐渡文化会館」を「佐渡平和会館」に名称変更したとも考えられる。

## 五、顕正会佐渡会館の建設予告

『顕正新聞』平成二三年二月一五・二五日合併号に以下の記事が掲載された。

『長岡会館 感涙滂沱のなか御入仏式



佐渡流罪の忍難慈勝を拝し奉る「新潟三〇万・佐渡会館」みつめ猛進開始  
『新潟三〇万を見つめよ（長岡会館入仏式での浅井昭衛会長の講演）

さて新潟顕正会は、四十七都道府県の中では五位です。東京、埼玉、神奈川、千葉に次ぐ五位です。首都圏を除く地方では第一位ですね。まさに先陣を切っている県であります。

私は平成十七年五月に「朱鷺メッセ」で開催した一万人の新潟県大会で、こう申しました。

「新潟の弘通三十万に達したとき、大聖人様の佐渡御流罪を偲び奉って、佐渡に会館を建て、さらに塚原三味堂付近に記念碑を建立したい」と。

いま新潟顕正会は約十二万五千。三十万まで、二倍ちょっとであります。さあ本日より、新潟の全顕正会員は三十万めざして敢然と立ってほしい。そして佐渡会館御入仏式には、全幹部そろって参列しようではないか。こう私は念願しておりますが、みなさん、どうです。（大拍手）』

文の通り、平成一七年五月八日、顕正会は新潟市朱鷺メッセ（国際会議場・展示場を備える大型複合施設）で「新潟県大会」を開催し会員一万人が参加した。この大会において、浅井昭衛会長は、「新潟三十万弘通の暁の佐渡会館と塚原記念碑建立」を宣言し、今回の長岡会館完成に際し再び、「新潟三十万・佐渡会館」を新潟会員の目標として促したものである。現在、新潟県内の顕正会員は公称「十二万五千」人すると、三十万達成は平成三三年の佐渡法難七五〇年頃を見越した目標とも受け止められる。

浅井会長は、佐渡会館・塚原記念碑建立以外にも小湊・龍口・身延等で同様に会館・記念碑の建立を宣言しているが、いづれも実現していないと云う。しかしながら、会館の建設は資金面で十分可能な点や、新潟県内の顕正会員が「新潟三十万・佐渡会館」を真剣に目標としている様子が紙面より判断できる点、同会員の勧誘に関する事件が県内で発生している事等から、今後も警戒を強める必要があると思われる。

#### 新潟県内における顕正会会員の事件

近年、新潟県内で顕正会会員による以下の事件が地方紙・全国紙等で報道されている。

平成二〇年一月一七日『新潟県警警備一課は一七日、宗教法人「顕正会（けんしょうかい）」へ強引に入会させたなどとして、逮捕監禁と強要などの疑いで、いずれも会員の新潟市中央区紫竹山、職業不詳、〇〇〇容疑者（三一）と、同市の男（二〇）を逮捕、さいたま市の同会本部などを家宅搜索した。

調べでは、午腸容疑者らは平成一八年一月一二日、新潟市の男性（二一）をレストランに呼び出し、同会に勧誘したが拒否された。男性が逃げようとしたため、投げ飛ばすなどして車に監禁、同市の顕正会施設「新潟会館」に連れて行き、脅迫して入会させた疑い。』（『産経新聞』）

平成二一年一月二〇日『宗教法人「顕正会」（本部・さいたま市）から脱会しようとした男性にけがを負わせた

して、新潟東署と県警警備一課は二〇日午前、傷害の疑いで、同会員で長岡市に住む専門学校生の少年（一八）を逮捕した。県警は同日朝、新潟市中央区と三条市島田の「会館」など関係先四カ所を、約五〇人態勢で家宅搜索。組織的関与がないか調べている。（『新潟日報』）

平成二十一年一月一二日（右記の）事件で、同会が県内の高校生や知的障害者らへの勧誘を繰り返し、学校や障害者施設などとトラブルを続発させていたことが二〇日、分かった。けがを負った男性は昨年、少年の勧誘で同会に入会していた。

新潟市内の障害者施設関係者によると、同会による知的障害者への勧誘は、三、四年前から活発化。駅周辺や繁華街で女性会員が声を掛け、勧誘の目的を告げずに「会館」へ連れて行き、入会させることが多いという。

（『新潟日報』）

新潟県警によると、顕正会の勧誘や脱会に関する相談が、平成一六年～一八年には合計約三〇〇件、二〇年には約二〇〇件あったと云う。（『産経新聞』）

平成二十三年一月末現在、新潟県内の顕正会会員数は、公称一二万二六八六人であると云う。前述の『顕正新聞』にある通り、上記会員数は、四十七都道府県の中では五位、首都圏を除く地方では第一位であり、県内の同会員は、浅井会長の「新潟三十万・佐渡会館」の号令の下、信者獲得に過度のノルマを課せられ、勧誘に奔走していると云う。佐渡島内においても顕正会会員の寺院・家宅訪問による強引な勧誘が後を絶たない。また、高校生（学校内の勧誘）や知的障害者への勧誘の事例、公共の施設（佐渡島開発総合センター、アミューズメント佐渡会議室等）を利用した勉強会も報告されている。

## 結

(一) 創価学会は、一地区に信徒数三万人を超えると会館を建設すると云うが、人口約六万人の佐渡市に二つ目の会館を建設した理由は、島外の学会員の研修等が目的とも考えられる。前述した通り、観光ホテル八幡館の近距離に会館を建設した事も研修時の利便性を考慮したものであろう。研修目的として島内の日蓮聖人霊蹟参拝が考えられる。したがって、宗門寺院の遥拝（参拝）も想定し得るので、対応を検討する必要があると思われる。

(二) 今回の創価学会新潟新佐渡会館の調査により、建設業者を通じた用地の取得が明らかとなった。したがって、顕正会が会館を建設する場合も同様な手段を用いる事が想定されるので、島内の建設業者に広く情報提供を呼びかけ、顕正会の危険性を伝える等、初期対応の準備を検討中である。

の手引きや入門書が欲しい人には、勝呂信静師の書いた*Introduction to the Lotus Sutra*を大いにお薦めする。また、ジーン・リープス氏の著書には、法華経の寓話についての解説書*Stories of the Lotus Sutra*もある。立正佼成会の設立者である庭野日敬氏（1906-1999）の書いた*Buddhism for Today*という法華経についての素晴らしい解説書もある。仏教伝道協会から発行された久保継成氏と湯山昭氏の英訳もまた、インターネットサイト[www.bdkamerica.org/digital/dBET\\_T0262\\_LotusSutra\\_2007.pdf](http://www.bdkamerica.org/digital/dBET_T0262_LotusSutra_2007.pdf) で入手可能である。

北米にいる仏教初心者が方向を見失わないように、現在入手可能なたくさんの資料を利用できるようになることを私は願う。仏教は決して近付きがたいものであってはならないが、仏教に対する理解を首尾一貫したものにするためには、こういった資料に整然とアプローチする必要がある。それが、私が願うことだ。仏教とは何か、どのように発展してきたのか、といった基本的な概観が初心者には必要なのだ。地方の環境にいるのなら、実際に修行をしている仏教徒に会って、仏陀の教えを翻訳したものに頼りながら修行を経験したりする必要がある。このようにして、仏陀の教えについて基礎から最も深いところまで徐々に知識を増やし、修行をうながし導くことができる。

（本文で「仏教」と訳した語は、原文ではthe Dharma, the Buddha Dharma, Buddhismと使い分けられているが、表題を除いて読みやすいように訳語を統一した。）



特別な関心事である。また、維摩経は阿羅漢という初期の仏教理想に対し（法華経の中で見られるより融和的な一乗の教えに比較して）最も厳格な（しかもユーモアのある）批判を表している。不二の教理に関しての逆説的で遊び心のある繊細な教えなので、これもまたお薦めする。その他にも様々な英訳が入手可能だが、ジョン・マクレイ氏（John McRae）の英訳は**bdkamerica.org/digital/dBET\_Srimala\_Vimalakirti\_2004.pdf** で、ロバート・サーマン氏（Robert Thurman）の英訳は**www2.kenyon.edu/Depts/Religion/Fac/Adler/ReIn260/Vimalakirti.htm**で入手可能である。

天台宗や日蓮宗の観点から見ると、仏陀の教えは全てついには法華経へ帰一する。上記の経典や作品を読んだ人が法華経に注目してみると、その用語や引用文、又は譬喩も理解することができるだろう。法華経は上記の資料に載っている教えに精通しているので、その背景知識を持って読むのはとても価値のあることだし、貴重な経験となるだろう。逆に、法華経は仏陀の教え（悟りの到達や目覚めの直観）の包括的な目標を述べている。このような理由で、東アジア仏教に大きな影響を与えた経典である。幸いなことに多くの英訳も入手可能で、現在絶版になっているが日蓮宗から発行された村野宣忠師（1908-2001）の英訳も存在している。その新改訂版も出版されている。

一方で、ジーン・リーブス氏（Gene Reeves）の英訳をお薦めする。リーブス氏の英訳は、いわゆる法華三部経の開経と結経としてそれぞれ知られている無量義経（the Sūtra of Innumerable Meanings）と仏説観普賢菩薩行法経（the Sūtra of Contemplation of Dharma Practice of Universal Sage Bodhisattva）の英訳も含まれている。もっと学術的な英訳を望む人には、レオン・フルビッツ氏（Leon Hurvitz 1923-1992）の*Scripture of the Lotus Blossom of the Fine Dharma*をお薦めする。フルビッツ氏の英訳は法華経についてのことだけだが、鳩摩羅什師（Kumarajiva 343-413）による中国語版では省かれたり、内容が違ったサンスクリット語版からの一節の英訳を含む解説が付いている。法華経へ

仏教初心者が仏陀の基礎的な教えを学んだら、大乘仏教の教えを知るべきだ。大乘仏教の教えは、少なくとも仏教の基礎を知っていることを想定して新たな題材で進展している。大乘経は大量にあり、その中でも華嚴経 (the Flower Garland Sūtra) のように非常に長くて分りづらく複雑なものもある。普通の修行者はこのような經典を全部読む必要はないが、仏教修行の刺激や手助け、心の浄化に不可欠なヒントを得る為にパーリ語經典を読んでおく必要があると思う。私と思う。金剛経や般若心経の中で述べられている“空” (S.śūnyatā) に関する教えについては、少なくとも読んで知っておく必要があると思う。上記でも述べたように、この二冊の經典に関しては、ティク・ナット・ハン師の英訳と解説が彼の本 *Awakening of the Heart* の中で、そして学術的に素晴らしい英訳と解説がエドワード・コンチェ氏の *Buddhist Wisdom: The Diamond Sutra and The Heart Sutra* という本の中で見つけることができるし、他の様々な英訳もインターネットサイトで見つけることもできる。しかし、金剛経と般若心経は、菩薩道が詳しく述べられていないので、經典ではなく論をお薦めする。論とはシャンティデーヴァ (Santideva) の書いた入菩提行論 (Bodhicaryavatara) といい、大乘仏教の菩薩乗の素晴らしい包括的な要約が書かれており、現在解説付きの英訳も多く存在している。私が最もよく知っているのは、ケイト・クロスビー氏 (Kate Crosby) とアンドリュー・スキルトン氏 (Andrew Skilton) の英訳である。(特に東アジアの大乘仏教を理解する為に) もう一冊、唯識・仏性・本覚・始覚など大乘仏教でその後発展した教理を扱った大乘起信論 (the Awakening of Faith in the Mahāyāna) という短い論文がある。鈴木大拙氏同様、他の人も何人かが英訳をしたが、[thezensite.com/ZenTeachings/Translations/Awakening\\_of\\_faith.html](http://thezensite.com/ZenTeachings/Translations/Awakening_of_faith.html)で見つけることができる羽毛田義人氏の英訳を私はお薦めする。色々な理由があるが、初心者は次に維摩経 (the Vimalakīrti Sūtra) を読むべきだ。この經典は大乘経にしては比較的短い、在家の維摩居士を理想化することに焦点を置いているので重要である。それに、在家の人たちが取り組む行は現在北米にいる仏教に興味がある人たちにとって

おらず現在中国語訳でしか存在しない。研究者の間ではパーリ語經典と阿含經典とが比較されるが、両方に載っている仏陀の教えは本質的には同じである。英語を話す人にとってはパーリ語經典の方が身近な經典であるが、本棚を全部埋め尽くすほど大量である。幸いに、基礎的な仏教の教えを学ぶ為にパーリ語經典の全ページを読む必要はない。

入手可能で包括的な基礎学問は、次の二冊の選集：比丘菩提（Bhikkhu Bodhi）の書いた*In the Buddha's Words*、イギリス上座部僧侶であるナナモリ比丘（Bhikkhu Nanamoli 1905-1960）の書いた*Life of the Buddha*のどちらか又は両方から得ることができる。二冊ともパーリ語經典から引用しているが、読者を正しく導く為に権威ある翻訳家による解説も一緒に付けている。最初の本は、仏陀の一生を描いて読者を仏陀の基礎的な教えと最も重要な教えに導いている。二冊目の本は、仏陀の一生をもっと詳細に描いてこれもまた最も重要な教えを載せているが、著者が一節一節を説明していないので理解するにはもう少し努力が必要である。

また、法句經（Dhammapada）、特にジョン・ロス・カーター氏（John Ross Carter）とマヒンダ・パリハワダナ氏（Mahinda Palihawadana）の英訳と解説も真剣に仏教を学ぶ学生にお勧めしたい。ティク・ナット・ハン師の書いた*The Heart of the Buddha's Teaching*は、經典の一節一節を集めたものではないが、パーリ語經典や阿含經典両方からの引用文をたくさん載せているし、基礎的な仏教教理と修行の解説として手助けになるかもしれない。また彼は、*Awakening of the Heart: Essential Buddhist Sutras and Commentaries*という彼の以前の英訳や解説を集めた選集を最近出版した。その選集には、パーリ語經典や般若心經、金剛經から選んだ教えも掲載し、仏教の基礎的な教えや修行と同様に大乘仏教の中心的教理をいくつか載せているので、仏教初心者にとって非常に価値のある本であろう。もちろん、パーリ語經典に載っている多くの教えや、初心者をつまらぬ題材に導く記事は、[accesstoinsight](http://www.accesstoinsight.org)というサイトで入手可能である。

に書かれた仏教への紹介本もあるが、テーマが浅薄だし、もう一度言うが著者が書いている仏教宗派についてあまり知らない為、私は全面的にそういった本を信用していない。

こういったことによって、「日蓮仏教は浄土仏教の一種である」とか「日蓮仏教が変形して日蓮正宗や創価学会になった」というような誤った主張が生じる。何も知らない人たちはwikipediaのようなサイトに頼りがちだが、偏見や誤解があり用心が必要である。

私が今まで読んだ仏教に関する本の中では、ドナルド・W・ミッチェル氏 (Donald W. Mitchell) の書いた *Buddhism: Introducing the Buddhist Experience* だけが唯一公正に、そして十分掘り下げてありとあらゆる仏教を述べている本であったと感じる。ミッチェル氏の本には、様々な宗派の修行者が書いた記事が載っていて、実際のメンバーがどのようにして教えや修行を理解しているのかがわかるという長所がある。ちなみに私個人の仏教教理の理解は [nichirenscoffeehouse.net/Ryuei/Overview.html](http://nichirenscoffeehouse.net/Ryuei/Overview.html) で入手可能である。

本であろうがインターネットの記事であろうが、どんな教理も完璧なものはないと思うが、少なくとも仏教の視野や歴史、そして仏教が何年もの時をかけて様々な国でどのように発展してきたかを理解するのに十分な指導を仏教初心者が得られることを期待する。一旦偉大な仏教の教理を知れば、初心者が仏陀の言葉を通じて、もしくは少なくとも仏陀の教えを翻訳した信用できる本を読むことで仏教の勉強をする準備ができたと言えよう。すなわち私にとってこのことは、パーリ語經典の英訳の中にある教えから始めることを意味する。パーリ語經典とは、スリランカや東南アジア（ビルマ、カンボジア、タイ、ベトナムの一部）で伝えられた上座部仏教の經典であり、大乘仏教の初期の頃かそれ以前のもの（原始仏教）で現存している英訳された唯一の完全經典である。阿含經典（サンスクリット語で書かれた歴史上の仏陀の教えが書いてあるもう一つの初期經典）は、様々な原始仏教の教えを構成したものであり、英訳されて

com/watch?v=CpabQrX\_eKs) の中では、創価学会のメンバーが他のメンバーや興味のある人々に対して毎日どのように修行をすればいいのか教える為に、法華經の方便品や如来寿量品からの一節を唱えている。このようにyoutube上には、様々な仏教修行の方法について無数の映像が存在する。本来このレポートは特に何かの修行をお薦めするという目的ではないので次に行きたい。

私自身、仏教についての本を読むことから実際の仏教修行に進んでいったのだが、まず最初に修行をしたり、少なくとも実際の修行に惹かれることが仏教について勉強するのには最適だと私は思う。

初心者はまず一般的な仏教教理を知り、もしその後修行に進んだら、自分が始めた修行がどのような系統を持つものなのかを知ることが一番最適であると思う。そうすれば、何年もの時をかけ国を超えてどのような修行が壮麗な仏教体系に適合しているのかがわかるだろう。例えば、日蓮宗の修行をしたい人にとって一般的な仏教の紹介と日蓮宗の宗派を知る為に、日蓮宗開教布教センターのオンラインブックストア（[nichiren-shu.org/books.html](http://nichiren-shu.org/books.html)）で入手可能な *Lotus Seeds* や *Awakening to the Lotus* を読むことをお薦めする。全体的に仏教の教理を知りたいということになると少々難しい。なぜなら、本の著者が仏教徒なのだが自身の宗派が持つ偏見を持っていたり、仏教徒でない人が部外者の立場から書いているために自身が書いている宗派や系統に何の深い知識も持っていないことがあるからだ。残念なことに、私が大学生時代に読んだ2冊の本、ワルポーラ・ラーフラ氏の *What the Buddha Taught* やエドワード・コンチェ氏の *Buddhism: It's Essence and Development* はお薦め出来ない。ラーフラ氏の本は全体的に仏教教理に触れず上座部仏教に制限された記述しかしていないし、コンチェ氏の本は50年も改訂されていない上に何よりも日蓮宗派についてひどく間違った記載がされているからだ。ジョナサン・ランドー氏 (Jonathan Landaw) の *Buddhism for Dummies* やゲイリー・ガシュ氏 (Gary Gach) の *The Complete Idiot's Guide to Buddhism* のような宗派に属していない人の為

ラデルフィアにある仏教集団の正当性や信頼性を判断することなども当然出来るはずはなかった。

現在北米にいる修行者が、困惑したり実際に修行せずに仏教に関する書物ばかりを読んで行き詰まるようなことなく、どのように進みつつけていけばいいのか私は考えている。初心者を読むべき翻訳や作品のリストを挙げる前に私が言いたいのは、仏教は単に教義や教理の学習を目指すのではなく修行するのが目的だと心に留めておけば、仏教の教えは正しく理解されていると私は確信しているということだ。逆に、仏陀が実際にお経の中で何を伝えたかったのかを学ぶことによって、仏教修行は促されるはずだと私は思う。

仏教について学びたいと思っている非仏教文化圏にいる現代人は、本を読んで勉強する必要があるが、一旦本を置き、コンピューターから離れ、実際に仏教修行者に会い、修行とはどんなものか自分の目で見ない限り本当の仏教について学ぶことは出来ないと思う。仏陀は人々に「直接来て見るべき」（パリー語で ehi-passiko）だと教えていることを覚えておくべきだ。本に書いてある教えを読んだり、単にそれを覚えたり、仏陀の意見や考えに理知的に同意しろとはおっしゃってはいないのだ。

北米にいて仏教に興味を持った人は大抵、特別な修行（座禅やvipassanāのような瞑想）や、積極的な感情や人生においてより落ち着いた同情的な見通しを培う確実な方法に惹かれている。修行を始め、培い、熟練することを私は人々にお勧めする。すでにそのような何らかの修行をしている人は、本やオンラインテキストなどを通じて仏教の勉強をしていると思う。今日では、地元の瞑想センターや初心者講習会、youtubeでさえも基本的な仏教の瞑想修行を見つけて学ぶことは比較的容易である。例えば、youtube（[youtube.com/watch?v=95M7o8q8Bao](https://www.youtube.com/watch?v=95M7o8q8Bao)）の中で、アメリカ曹洞宗の禅指導者であるブラッド・ワーナー師（Brad Warner）が禅修行の方法を紹介しているし、同じく（youtube.



修行するにはまず信頼の出来る教師や団体、教会を見つけて、顔と顔を向き合わせて修行の始め方を学ばなければならない。過去を振り返ると、私が高校や大学時代に読んだ本には、肉体的・精神的な心構えが書いてあったので瞑想修行に関する多くの知識を与えてくれたが、本の指示に従い修行を実践する自信がなかった為、実際修行することはなかった。私自身、修行僧と出会うことで初めて修行を実践することができた。最初、フィラデルフィアの通りで折伏布教をしていた創価学会から法華経やお題目の唱え方を学び、その団体から脱退した後、フィラデルフィア・シャンバラセンター（the Philadelphia Shambhala Center）（チョギヤム・トゥルンパ師Chogyam Trungpa Rinpocheも加盟している）とフィラデルフィア・ワン仏教教会（the Won Buddhist Temple of Philadelphia）（ソッタイサンSot'aesanと呼ばれるパク・チュンギムPak Chungbin 1891-1943が1916年に設立した韓国寺院）で座禅を学ぶことができた。私の経験から言うと、どんなにきちんと書いてあるものでも解説書だけでは人々を修行させることはできない。たまに、それだけでも出来る人はいるが、多くの人々にとっては活発な修行団体や経験ある指導者が修行する気分になせ、内容の濃い修行をさせるのに必要不可欠である。

ここでもう一度言うが、今やインターネットがイエローページに代わり地元団体を探し出す最速の手段となった。例えばmeetup.comというサイトでは、地元の仏教・瞑想団体がいつ、どこで集会を開いているのかを手軽に知ることができる。また、最近は大抵の主要都市に仏教修行センターや仏教寺院がある。（その多くの仏教施設は、禅の集団であったり、チベット仏教の一派であったり、ビパッサナー（vipassanā）という上座部仏教から派生した瞑想修行集団に関連がある。）東アジアや東南アジアからの様々な移民団体が設立した寺院もあるが、このような場所は仏教初心者が簡単に探し出せるような場所ではなく、他民族の修行者を迎え入れる条件も整っていない。様々な種類の仏教が多く存在しているので、どの宗教団体が本物でどの宗教団体が疑わしいのかを初心者が気づかないのが問題である。当時高校や大学の生徒だった私には、フィ

他にもまだ作成中のものもある。このシリーズは仏教伝道協会ホームページ <http://www.bdkamerica.org/default.aspx?MPID=4> から注文でき、英訳のいくつかは <http://www.bdkamerica.org/default.aspx?MPID=81> で無料で入手可能である。また、東アジアで大変影響を及ぼした涅槃經 (Mahāyāna Nirvāna Sūtra) の完全英訳が [nirvanasutra.net](http://nirvanasutra.net) で入手可能である。山本光照師 (Rev. Kosho Yamamoto) の初期の英訳をトニー・ペイジ氏 (Tony Page) が少し改訂したものらしいが、個人的にはその信頼性を保証できない。

仏教出版協会や [accesstoinight.org](http://accesstoinight.org) (経典を英訳した書籍を取り扱っているサイト)、仏教伝道協会などの努力のおかげで、英語を話す人にとって、パリ語経典や影響力のある大乘経の信頼できる (少なくとも読みやすい) 英訳に出会うことがこれまでよりも容易になった。阿毘達磨俱舍論 (Abhidharma treatises) や多くの独創的な仏教解説、評論もまた、こういった団体や多くの翻訳家のおかげで簡単に入手可能になったが、改良されるべき点はまだまだある。英語を母国語とする日蓮宗教師として不満なのは、日蓮聖人が引用された多くの経典や御遺文が未だ英訳されていなかったり、されていても信頼できないということだ。例えば、心地観經 (the Cultivation of the Mind Ground Sūtra) が未だ英訳されていない。天台大師智顗に関しては、摩訶止観 (Mo-Ho Chih-Kuan) の完全な英訳どころか、多くの他の著作もまだ英訳されていない。

最近の仏教修行者や学者の解説は言うまでもなく、すでにインターネット上にある仏陀の教えを読んで理解するのに一生をかけても足りない。初心者が仏教を知るために何から始めればいいのかわからないのは当然だろうし、十分な基礎知識なしで多くの本を読むのは人々を混乱させるだけだろう。

仏陀の教えや最近の仏教学者僧の解説等を読むだけでは、実際に修行して悩みを克服したり自分や他人の心のとらわれを解放させる代わりにはならない。

仏教宗派に共通して広まっている仏陀の基礎的な教えを拝読したいのなら、現在入手可能なパーリ語經典の英訳から始めた方がいいだろう。1895年、パーリ語テキスト協会は初めてのパーリ語經典英訳を作成した。この英訳は、イギリス文官が西洋仏教学者の為に先駆的に作成したものであり、残念ながら現代の非専門家や仏教初心者にはそぐわないものである。もっと最近ではWisdom Publicationsが、アメリカ上座部仏教僧で仏教出版協会（the Buddhist Publication Society）の第2代理事長でもある比丘菩提（Bhikkhu Bodhi b.1944）と協力し、部派仏教（the Nikāya）や説教集の英訳（Wisdomの“仏陀の教え”シリーズ*Teaching of the Buddha Series*の一部）を新たに発行している。新しい英訳はもっと手軽に入手できて解説や脚注がついているので、仏陀の初期の教えを読みたいと思っている人にとってはとても好都合である。

そして最も重要なのは、仏教修行者の為に実在の修行者が英訳しているという点である。このシリーズの出版物は[http://www.wisdompubs.org/Pages/c\\_teachings.lasso](http://www.wisdompubs.org/Pages/c_teachings.lasso)で注文することができる。さらに、こういった高価な本を購入する余裕のない人には、パーリ語經典（学者・修行者の書いた多くの論文や解説も同様に）の大部分の英訳を[access.toinsight.org](http://access.toinsight.org)というサイトで見つけることもできる。たまにこのサイトには、1つの教えにつきいくつかの英訳を載せている時もあるが、ほとんどの英訳をアメリカ上座部仏教僧であるサニサーロ比丘（Bhikkhu Thanisarro b.1949）が手掛けた。

東アジア仏教教典に関しては、イーハン沼田博士（Dr. Yehan Numata）が1965年に設立した仏教伝道協会（仏教を推進する協会）が多大な貢献をした。また、1986年カリフォルニア州バークレーに関連団体の沼田仏教翻訳研究センター（The Numata Center for Buddhist Translation and Research）を設立して以来、大正新脩大藏經（The Taisho Tripitika）の英訳出版計画に従事した。この計画は、仏教伝道協会大藏經翻訳シリーズ（The BDK English Tripitika Series）としてよく知られていて、既に50巻にも及ぶ英訳を出版し、

した利点や困難を調査した結果、仏教をまだよく知らない人には何が仏教なのかを自分の足で探して、修行を正しく行っている仏教団体を見つけることを私はお勧めする。

パリー語經典であれ大乘經であれ仏陀の教えの翻訳が欲しい人にとっては、アマゾンなどのインターネットサイトで見つけることができるので、地元の本屋や大学の図書館にどういった本があるかということはもはや問題ではない。

トーマス・クリアリー氏の*Flower Ornament Scripture*やエドワード・コンチェ氏訳の般若波羅蜜經、バートン・ワトソン氏 (Burton Watson) 訳の維摩經 (*Vimalakīrti Sūtra*) など多くの本 (古本含む) は、アマゾンやその他のサイトでオーダーすれば簡単に入手することができる。

例えば、ニール・ドナー氏 (Neal Donner) やダニエル・スティーブンソン氏 (Daniel Stevenson) が部分的に訳した天台大師智顗 (Chih-i 538-597) の摩訶止観 (Mo-Ho Chih-Kuan) の古本ですら注文することが可能である。実際、本を注文する必要など無い。単にアマゾン・キンドルのような電子書籍を用いてダウンロードすればよいのだ。例えば、ジーン・リープス氏 (Gene Reeves) の *The Lotus Sūtra: A Contemporary Translation of Buddhist Classic* はアマゾンからキンドルにダウンロードするのに1分もかからない。多くの經典が様々なインターネットサイト上で無料ダウンロードできるので、わざわざ本を注文してお金を払う必要はないのだ。般若心經 (the Heart Sūtra) や金剛經 (the Diamond Sūtra)、法華經 (the Lotus Sūtra)、華嚴經 (the Flower Garland Sūtra) の抜粋、そして涅槃經 (the Nirvāṇa Sūtra) などの様々な翻訳は Mahāyāna Buddhist Sūtra ([www4.bayarea.net/~mtlee/](http://www4.bayarea.net/~mtlee/)) というサイトで見つけることができるが、残念なことにそのサイトの情報全てがいつも最新のものであるというわけではない。

歴史上実在していた釈尊 (Śakyamuni Buddha) の教えをもとにした全ての

chin) の完全翻訳本を見つけた。また、クリアリー氏の他の作品や東アジアの華嚴の教えについての本の他にも、金剛經 (the Diamond Sutra)、般若心經 (the Heart Sutra)、8000行にも及ぶ般若波羅蜜經 (Perfection of Wisdom Sutra)、大般若波羅蜜經 (the Large Perfection of Wisdom Sutra) を含む般若波羅蜜經をコンチェ氏が訳したものも見つけることができた。後で理由を述べるつもりだが、その当時私は、19世紀後半にパーリ語テキスト協会 (the Pali Text Society) が発行したパーリ語經典の翻訳をまだ見たことがなかった。

1980年代でも、大学の図書館に入れてどんな本を探すのかははっきりとわかっていれば、パーリ語經典や大乘經典 (Mahāyāna) の中で書かれている仏陀の重要な教えの翻訳を見つけることも可能だった。大学を卒業して1989年にサンフランシスコを訪れたとき、幸いにも私は地元フィラデルフィアの本屋には置いていない沢山の仏教翻訳書を見つけることができた。例えば、その当時サンフランシスコの日本人街近くにBuddhist Churches of America (BCA) 本部ビルがあり、その中にある本屋で浄土仏教に関する本を見つけることができた。また、バークレーにあるシャンバラ (Shambhala) ブックストアでも何冊か本を見つけることもできた。専門店や特別注文、大学の本棚などで仏教教義を訳した素晴らしい本を見つけることができて、そういった教典は文脈や教義文の解説がない為内容を理解するのが難しかった。当時を振り返ると、ものすごい量の資料に出会うことが出来たと思うが、当時の私にはまだ経験・能力がなかった為そういった資料を首尾一貫して見るができなかった。

話は現代、2012年にとぶが、どんな理由であれ仏教に新たに興味を持った北米の人はどれだけ仏教に近づけたかを気にかけている。ある意味、インターネットのおかげで簡単に何でも手に入るようになったと言えるが、反対に、そのものすごい情報量の為何が正しいのかそうでないのか見分けたり、情報の全てを理解することさえ難しくなってきたと言える。また、資料だけでなく、仏教団体へもより近づきやすくなったと言える。近年、仏教を求めている人が経験

仏教宗派に一般に伝えられている基本の教えを載せている。パーリ語原文に書かれているように、大乘仏教の教えはどのような起源を持っていたのか、大乘仏教の教えが釈尊の教えの中にどのように予示されていたのかをワルポーラ・ラーフラ氏は示したかったのではないだろうか。エドワード・コンチェ氏はどの仏教宗派にも属していなかったが、瞑想修行者であり、般若經の有名かつ卓越した翻訳家であった。彼の本には、自身の偏見や20世紀半ばの西洋仏教学の限界も見られるが、広い見解で仏教の歴史や教えについて書かれてあった。たとえば日蓮教学について、彼は次のように書いている。(鈴木大拙氏も引用している)

日蓮宗を阿弥陀仏教の一派とみなすのはごく普通なことである。国家主義的な神道の一派としてみなす方がもっと適しているだろう。日蓮聖人は我が強く短気であるがゆえに、仏教教師としては不適格である個人・種族主義を明言した。

法華經の中で自分自身の名が挙げられていただけでなく、日本人が世界を正しい方向へ導くことができる選ばれた人種だとも彼は確信していた。

日蓮宗信者は今でもなお攻撃的で、他の仏教者とうまくやっていけないと鈴木氏は述べている。

本が不足していた時代にもかかわらず、ラーフラ氏やコンチェ氏の2冊の本を通じて、私は1980年代に本屋で入手可能な人気のある本に載っている限られた仏教見解を克服することができた。ビート (the Beats) や後のヒッピー (the Hippies) と言われる北アメリカ反体制文化に訴えかけた日本の禅の教えよりも、仏教にはもっと多くの教えがあったのだと私は気づいた。

さらに私は大学の図書館で、トーマス・クリアリー氏 (Thomas Cleary b.1949) 訳の英題 *Flower Ornament Scripture* という華嚴經 (the Hua-yen-



かれる集会へ人々を勧誘していた。当時私は本を読んだりして、日本仏教と言えば禅宗という印象を持っていた為、創価学会が禅宗とは違ってとても驚いたことを今でも覚えている。この印象は私と同世代の人々や、恐らく今でも大部分のアメリカ人の持っている印象であろう。その当時入手可能な本のどれにも、浄土宗、日蓮宗、真言宗、天台宗のような日本仏教の宗派に関する説明はなかった。他国の仏教については本当に情報が少なかったが、チョギヤム・トゥルンパ（Chogyam Trungpa Rinpoche 1939-1987）の本やダライラマの初期の作品があった為チベット仏教は例外だった。郊外に住む高校生であった私は、ティク・ナット・ハン師（Thich Nhat Hanh、ベトナム禅僧）の本を知るところか見た憶えもなかった。もちろん、中国や韓国仏教についての本を見た憶えもなかった。だから私だけでなく多くの人々にとっても、仏教とは禅仏教であった。

仏教についてより多く学び経験する機会は、フィラデルフィアにあるラサール大学というカトリックの大学に私が進学した時にやってきた。当時まだ禅に興味を持っていたのだが、本に載っている解説を読むだけで、禅のグループを探したり座禅を実際に試してみることはなかった。私の興味は鈴木大拙氏（D.T. Suzuki）、アラン・ワッツ氏（Alan Watts）、その他の人気のある著者など過去の禅の達人についての公案や逸話に限られていた。また、創価学会、日蓮仏教、法華経、お題目修行にとっても関心が出始めた頃でもあったし、創価学会は、少なくとも日本には禅以外にもっと色々な仏教があるという事実を私に気づかせてくれた。

大学で受けたアジア宗教概観の授業では、ワルポーラ・ラーフラ氏（Walpola Rahula 1907-1997）の書いた*What the Buddha Taught*やエドワード・コンチェ氏（Edward Conze 1904-1979）の書いた*Buddhism: It's Essence and Development*というテキストを使用していた。*What the Buddha Taught*という本は、上座部仏教僧が書いたもので、パーリ語経典から重要な文章を抜粋し、全ての

研究・調査プロジェクト報告

# 北米に於ける法(ダルマ)の探求

—その当時と現在—

マコーミック龍英

1980年代、ペンシルベニア州フィラデルフィア郊外にいる10代の若者にとって、仏教の発見・勉強・修行は少し骨の折れるものだった。私が仏教に興味をそそられたのは高校時代であった。当時私はカトリックの高校に通っていた。その学校では何人かの先生が授業前に禅宗の逸話や公案を生徒達に話してくれた。そういった智慧深いお話は、私が仏教、少なくとも禅という仏教に惹かれる原因となった。当時インターネットは勿論、ボーダーズやバーンズ&ノーブルのような大型書店もなかった。仏教に関する書物を探している人たちにとって、当時は最も新しく人気のある本はそんなになかったし、臨済禅の支持者アラン・ワッツ師 (Alan Watts 1915-1973、*The Way of Zen*の著者)、鈴木大拙氏 (D.T. Suzuki 1870-1966、*Introduction to Zen Buddhism*の著者)、フィリップ・カプロー氏 (Philip Kapleau 1912-2004、*Three Pillars of Zen*の著者) の書いた本などに限られていた。鈴木俊隆氏 (1905-1971) の書いた曹洞禅修行についての本、*Zen Mind, Beginner's Mind*もまた見つけれられたかもしれない。ポール・レップ氏 (Paul Rep 1895-1990) の書いた*Zen Flesh*、*Zen Bones*といった本は、禅宗の逸話ばかりでなく、無門関 (*J. Mumonkan*) として知られている公案集翻訳の手がかりとなった。

仏教寺院や修行センターを見つけたくても、私にとって唯一の頼みの綱はイエローページのような自分が住んでいる州に限られた地域しか載っていないタウン誌しかなかった。フィラデルフィアで高校生が通える仏教グループと言えば創価学会だけだった。当時の創価学会信者は通りに出ては家やアパートで開

北米に於ける法の探求—その当時と現在—（マコーミック龍英）

*Nichiren Shu Books and Supplies*. Nichiren Buddhist International Center. Web. 31 July 2012. <[nichiren-shu.org/books.html](http://nichiren-shu.org/books.html)>.

*“Posers” with Brad Warner*. Web. 31 July 2012.  
<<http://www.youtube.com/watch?v=95M7o8q8Bao>>.

*Teachings of the Buddha Series*. Wisdom Publications. Web. 31 July 2012.  
<[http://www.wisdompubs.org/Pages/c\\_teachings.lasso](http://www.wisdompubs.org/Pages/c_teachings.lasso)>.

Thurman, Robert A.F., trans. *Vimalakirti Nirdeśa Sutra*. Web. 31 July 2012.  
<<http://www2.kenyon.edu/Depts/Religion/Fac/Adler/Reln260/Vimalakirti.htm>>.

Tsugunari, Kubo and Yuyama, Akira, trans. *The Lotus Sutra*. Bukkyo Dendo Kyokai. 2009. Web. 31 July 2012.  
<[https://www.bdkamerica.org/digital/dBET\\_T0262\\_LotusSutra\\_2007.pdf](https://www.bdkamerica.org/digital/dBET_T0262_LotusSutra_2007.pdf)>.

*Digha Nikaya*. Boston: Wisdom Publications, 1995.

Watson, Burton, trans. *The Vimalakīrti Sūtra*. New York: Columbia University Press, 1997.

Watts, Alan. *The Way of Zen*. New York: Vintage Books, 1999.

## Internet Sites

*Access to Insight: Readings in Theravāda Buddhism*. Web. 31 July 2012.  
<<http://www.accesstoinsight.org>>.

BDK Digital Texts. Bukkyo Dendo Kyokai. Web. 31 July 2012.  
<<http://www.bdkamerica.org/default.aspx?MPID=81>>.

*BDK Print Publications*. Bukkyo Dendo Kyokai. Web. 31 July 2012.  
<<http://www.bdkamerica.org/default.aspx?MPID=4>>.

*Gongyo C – for SGI and Nichiren Buddhists – with words*. Web. 31 July 2012.  
<[http://www.youtube.com/watch?v=CpabQrX\\_eKs](http://www.youtube.com/watch?v=CpabQrX_eKs)>.

Asvaghosha. Trans. Hakeda, Yoshida. *Awakening of Faith in Mahayana*. Web. 31 July 2012.  
<[http://www.thezensite.com/ZenTeachings/Translations/Awakening\\_of\\_faith.html](http://www.thezensite.com/ZenTeachings/Translations/Awakening_of_faith.html)>.

*Mahāyāna Buddhist Sūtras in English*. Web. 31 July 2012.  
<<http://www4.bayarea.net/~mtlee/>>.

McCormick, Michael. “Overview of Buddhism.” Web. 31 July 2012.  
<[nichirenscoffeehouse.net/Ryuei/Overview.html](http://nichirenscoffeehouse.net/Ryuei/Overview.html)>.

McRae, John, trans. *The Vimalakīrti Sūtra*. Bukkyo Dendo Kyokai. 2009. Web. 31 July 2012.  
<[https://www.bdkamerica.org/digital/dBET\\_Srimala\\_Vimalakirti\\_2004.pdf](https://www.bdkamerica.org/digital/dBET_Srimala_Vimalakirti_2004.pdf)>.

Meetup. Web. 31 July 2012. <<http://www.meetup.com>>.

北米に於ける法の探求—その当時と現在—（マコーミック龍英）

*Buddha: A New Translation of the Majjhima Nikaya*. Botson: Wisdom Publications, 1995.

Nhat Hanh, Thich. *The Heart of the Buddha's Teaching: Transforming Suffering Into Peace, Joy, and Liberation*. Berkeley: Parallax Press, 1998.

*Awakening of the Heart: Essential Buddhist Sūtras and Commentaries*. Berkeley: Parallax Press, 2012.

Niwano, Nikkyō. *Buddhism for Today: A Modern Interpretation of the Threefold Lotus Sutra*. Tokyo: Kosei Publishing, 1990.

Nyanaponika, Thera and Bodhi, Bhikkhu trans. & ed., *Numerical Discourses of the Buddha: An Anthology of Suttas from the Anguttara Nikaya*. Walnut Creek: AltaMira Press, 1999.

Rahula, Walpola. *What the Buddha Taught: Second and Enlarged Edition*. New York: Grove Press, 1974.

Reeves, Gene, trans. *The Lotus Sutra: A Contemporary Translation of a Buddhist Classic*. Boston: Wisdom Publications, 2008.

Reps, Paul and Senzaki, Nyogen, comp. *Zen Flesh, Zen Bones: A Collection of Zen and Pre-Zen Writings*. Boston: Tuttle Publishing, 1998.

Suguro, Shinjo. *Introduction to the Lotus Sutra*. Fremont: Jain Publishing, 1998.

Suzuki, D.T. *Introduction to Zen Buddhism*. New York: Grove Press, 1964.

Suzuki, Shunryu. *Zen Mind, Beginner's Mind*. Boston, Shambhala, 2006.

Trungpa, Chögyam. *Cutting Through Spiritual Materialism*. Boston: Shambhala, 1987.

*The Myth of Freedom: and the Way of Meditation*. Boston: Shambhala, 1988.

Walshe, Maurice, trans. *The Long Discourses of the Buddha: A Translation of the*

*Buddhism: It's Essence and Development*. Birmingham: Windhorse Publications, 2001.

*Buddhist Wisdom: The Diamond Sutra and the Heart Sutra*. New York: Vintage Books, 2001.

Crosby, Kate and Skilton, Andrew, trans. *The Bodhicaryāvatāra*. New York: Oxford University Press, 1996.

Donner, Neal, and Stevenson, Daniel B., trans. *The Great Calming and Contemplation: A Study and Annotated Translation of the First Chapter of Chih-I's Mo-Ho Chih-Kuan*. Honolulu: Kuroda Institute, 1993.

Gach, Gary. *The Complete Idiot's Guide to Buddhism 3<sup>rd</sup> Edition*. New York: Alpha Books, 2009.

Hakeda, Yoshito S., trans. *The Awakening of Faith: Attributed to Ashvaghosha*. New York: Columbia University Press, 1967.

Hurvitz, Leon, trans. *Scripture of the Lotus Blossom of the Fine Dharma (the Lotus Sūtra)*. New York: Columbia University Press, 2009.

Kapleau, Philip. *The Three Pillars of Zen: 25<sup>th</sup> Anniversary Edition*. New York: Anchor Books Editions, 2000.

Landaw, Jonathan; Bodian, Stephen; and Bühnemann, Gudrun. *Buddhism for Dummies*. Hoboken: Wiley Publishing, 2011.

Mitchell, Donald W. *Buddhism: Introducing the Buddhist Experience*. New York: Oxford University Press, 2002.

Murano, Senchu, trans. *The Lotus Sutra*. Tokyo: Nichiren Shu Headquarters, 1991.

Ñānamoli, Bhikkhu, trans. *The Life of the Buddha: According to the Pāli Canon*. Seattle: Buddhist Publication Society Pariyatti Edition, 1992.

Nanamoli, Bhikkhu and Bodhi, Bhikkhu, trans. *The Middle Length Discourses of the*



However, in order for the Buddha Dharma to be coherent and accessible there needs to be an organized approach to these resources. That is what I hope I have been able to outline above. A new person needs a basic overview in broad strokes of what Buddhism is and how it has developed. They need to meet actual practicing Buddhists if that is at all possible given the local circumstances. Then they need to follow up on their initial studies and experience with practice by resorting to the many translations of the Buddha's teachings available online or orderable online. In this way they can gradually build on their knowledge of the Buddha's teaching from the most basic to the most deep and subtle and in this way inspire and guide their own practice and realization of Buddha Dharma.

## Print Resources

Bodhi, Bhikkhu, trans. *The Connected Discourses of the Buddha: A New Translation of the Samyutta Nikaya*. Boston: Wisdom Publications, 2000.

*In the Buddha's Words: An Anthology of Discourses from the Pāli Canon*. Boston: Wisdom Publications, 2005.

Carter, John Ross and Palihawadana, Mahinda, trans.. New York: Oxford University Press, 1987.

Cleary, Thomas, trans.. *The Flower Ornament Scripture: A Translation of the Avatamsaka Sutra*. Boston: Shambhala, 1993.

Conze, Edward, trans. *The Perfection of Wisdom in Eight Thousand Lines & Its Verse Summary*. San Francisco: Four Seasons Foundation, 1973.

*The Large Sutra on Perfect Wisdom: With the Divisions of the Abhisamayāṅkāra*. Berkeley: University of California Press, 1975.

Asian Buddhism. Fortunately there are many translations available in English. There is a translation by Senchu Murano (1908-2001) put out by the Nichiren Shū, but at the moment it is out of print and I understand that a new revised version will be available before long. In the meantime, I would recommend the translation by Gene Reeves. Reeves' translation also includes translations of the *Sūtra of Innumerable Meanings* and the *Sūtra of Contemplation of the Dharma Practice of Universal Sage Bodhisattva* that are known respectively as the opening and closing sūtras of the so-called "Threefold Lotus Sūtra." For those who want a more scholarly translation I would recommend the translation by Leon Hurvitz (1923-1992) that is called *Scripture of the Lotus Blossom of the Fine Dharma*. Hurvitz's translation is of the *Lotus Sūtra* only, but it has an appendix that contains translations of passages from the Sanskrit version that differ from or were left out of the Chinese version by Kumārajīva (343-413). For those who would like a guide or introduction to the *Lotus Sūtra* I would highly recommend Shinjo Suguro's *Introduction to the Lotus Sūtra*. Gene Reeves has also written a book of commentaries on the parables of the *Lotus Sūtra* called *Stories of the Lotus Sūtra*. There is also a great commentary on the *Lotus Sūtra* by Nikkyo Niwano (founder of the Risshō Kōsei Kai, 1906-1999) called *Buddhism for Today*. The translation by Tsugunari Kubo and Akira Yuyama put out by the Bukkyo Dendo Kyokai is also available online at [bdkamerica.org/digital/dBET\\_T0262\\_LotusSutra\\_2007.pdf](http://bdkamerica.org/digital/dBET_T0262_LotusSutra_2007.pdf).

It is my hope that newcomers to Buddhism in North America will be able to access and utilize the many resources both in print and online forms that are available today in a way that will be helpful and practical and not confusing and disorienting. The Dharma does not have to be daunting.

recommend, though others have translated it as well including D.T. Suzuki. The Hakeda translation can be found online at [thezensite.com/ZenTeachings/Translations/Awakening\\_of\\_faith.html](http://thezensite.com/ZenTeachings/Translations/Awakening_of_faith.html). For many reasons I would recommend that new comers to Buddhism should next read the *Vimalakīrti Sūtra*. This sūtra is relatively short (for a Mahāyāna sūtra) but it is important because of its focus on an idealized lay bodhisattva, the titular Vimalakīrti, and lay practice is of particular concern to those interested in Buddhism in North America today. It also expresses some of the most severe (and yet humorous) critiques of the early Buddhist ideal of the arhat (which sets up the more conciliatory teaching of the One Vehicle found in the *Lotus Sūtra*). I also recommend it for its paradoxical, playful, and subtle teachings concerning non-duality. There are various translations of it available though the translation by John McRae is available online here [bdkamerica.org/digital/dBET\\_Srimala\\_Vimalakirti\\_2004.pdf](http://bdkamerica.org/digital/dBET_Srimala_Vimalakirti_2004.pdf) and the translation by Robert Thurman is available online here [www2.kenyon.edu/Depts/Religion/Fac/Adler/Reln260/Vimalakirti.htm](http://www2.kenyon.edu/Depts/Religion/Fac/Adler/Reln260/Vimalakirti.htm).

All the Buddha's teachings culminate in the *Lotus Sūtra* from the perspective of the T'ien-t'ai and Nichiren schools. If a person has read the sūtras and other works mentioned above, when they turn their attention to the Lotus Sūtra they will be able to understand its terms, references, and allusions. The *Lotus Sūtra* assumes familiarity with the teachings contained in the above works and so it will be a much more rewarding and richer experience to read it with that background knowledge. In turn, the Lotus Sūtra claims to present the overarching goal of all the Buddha's teachings – the attainment of buddhahood and the immediacy of awakening. For this reason it is a sūtra that has gained great importance and influence in East

assume that one is at least familiar with basic Buddhism, but introduces new themes and developments. There are many Mahāyāna sūtras and some of them, like the *Flower Garland Sūtra*, are quite long and extremely subtle and complex. I do not think that average practitioners need to read all of this material anymore than they need to read all of the Pāli Canon in order to get the essential points to inspire, guide, and clarify Buddhist practice. I do think that they should at least read and be familiar with the teaching concerning emptiness (S. śūnyatā; 空) as presented in the *Diamond Sūtra* and the *Heart Sūtra*. As I mentioned above, Thich Nhat Hanh's very accessible translations and commentaries on those two sūtras can be found in his book *Awakening of the Heart*. A good scholarly translation and explanation of both these sūtras can be found in the book *Buddhist Wisdom: The Diamond Sūtra and The Heart Sūtra* by Edward Conze. Various translations of those two sūtras can be found online as well, as mentioned above. The *Diamond and Heart* sūtras do not, however, cover the bodhisattva path in detail and for that I would recommend not a sūtra but a poem. The poem is the *Bodhicaryāvatāra* by Śāntideva (8th century), which provides the reader a beautiful and comprehensive summary of the bodhisattva vehicle of Mahāyāna Buddhism. There are currently numerous translations of this text, many with commentaries. The one I am most familiar with is the translation by Kate Crosby and Andrew Skilton. Another important work (esp. for understanding East Asian Mahāyāna) is a short treatise, attributed to Aśvaghosha but most likely composed in China, called the *Awakening of Faith in the Mahāyāna* that deals with matters of Consciousness Only, Buddha-nature, Original Awakening and Acquired Awakening and other such matters that developed in later Mahāyāna Buddhism. There is a translation by Yoshito Hakeda that I would

Theravada monk. Both books are composed of passages from the Pāli Canon with commentary by the respective translators in order to orient the reader. The first book provides an outline of the Buddha's life and walks the reader through all the Buddha's foundational teachings and most important discourses. The second book does a more thorough job of telling the Buddha's life story and it also provides the most important discourses but it is a bit more challenging as the author does not try to explain or interpret the passages beyond simply introducing their context within the life of the Buddha. I would also like to recommend that a serious student of Buddhism read the Dhammapada, in particular the translation and commentary by John Ross Carter and Mahinda Pālihawadana. *The Heart of the Buddha's Teaching* by Thich Nhat Hanh might also be helpful as a very accessible summary explanation of basic Buddhist concepts and practices. It is not an anthology of sūtra passages, but it does contain many citations from both the Pāli Canon and the Āgamas. Thich Nhat Hanh has also recently published an anthology of his previous translations and commentaries, called *Awakening of the Heart: Essential Buddhist Sūtras and Commentaries*. This anthology includes selected discourses from the Pāli Canon as well as the Heart Sūtra and the Diamond Sūtra and so would be invaluable to a newcomer to Buddhism in that it covers the basic teachings and practices of basic Buddhism and a few of the core concepts of Mahāyāna as well. Of course many of the discourses in the Pāli Canon as well as articles to help orient a newcomer to these materials are available online at [accesstoinight.org](http://accesstoinight.org).

After studying the basic teachings of the Buddha, a new comer to Buddhism should become acquainted with Mahāyāna teachings. Mahāyāna teachings

Assuming that no overview, whether in the form of books or online articles, will be perfect, it is to be hoped that a newcomer to the Dharma will at least get an adequate orientation that will enable them to understand the scope and history of Buddhism and how it has developed over time and in various countries. Once a newcomer has at least a familiarity with such a grand overview they are ready to start learning about Buddhism through the Buddha's own words, or at least through reading credible translations of those discourses attributed to Śākyamuni Buddha. This means beginning with the teachings found in the English translations of the Pāli Canon. The Pāli Canon is the canon of the Theravada school of Buddhism found in Sri Lanka and SE Asia (Burma, Cambodia, Thailand, parts of Vietnam). It is the only complete canon of early or pre-Mahāyāna Buddhism that still exists today and it has been translated into English. The Āgamas, another early collection of the historical Buddha's teachings written in a Sanskrit dialect, now exists only in their Chinese translation. The Āgamas are taken from different schools of pre-Mahāyāna Buddhism and they have not been translated into English, though scholars who have compared the Āgamas with the Pāli Canon have found that the Buddha's teachings are essentially the same in both. For English speakers it is the Pāli Canon that is the most accessible source of the Buddha's foundational teachings. The Pāli Canon is, however, large enough to fill a whole bookcase. Fortunately it is not necessary to read every page of it in order to learn the foundational Buddhist teachings that guide practice and prepare the way for the developments in Buddhist teaching that follow from them. An accessible and fairly comprehensive study of these foundations can be gained from either or both of the following two anthologies: *In the Buddha's Words* by Bhikkhu Bodhi, or *Life of the Buddha* by Bhikkhu Ñānamoli (1905-1960), a British



very deep knowledge of any of the schools or lineages they write about. Sadly I cannot recommend *What the Buddha Taught* by Walpola Rahula or *Buddhism: It's Essence and Development* by Edward Conze, the two overview books I read in college, because the former is restricted to Theravāda teachings and not an overview of Buddhism as a whole, and the latter is 50 years out of date and some things, like the Nichiren school in particular, are badly misrepresented. There are books specifically written to be non-sectarian introductions to Buddhism as a whole for non-scholars such as *Buddhism for Dummies* by Jonathan Landaw or *The Complete Idiot's Guide to Buddhism* by Gary Gach, but even those I have reservations about as some topics are treated too superficially and once again the writers rarely have any first hand knowledge of the schools of Buddhism they are presuming to write about. This results in misrepresentations such as the claim that Nichiren Buddhism is a form of Pure Land Buddhism, or the reduction of Nichiren Buddhism to a discussion of the Nichiren Shōshū and Soka Gakkai. Of course the new inquirer might also resort to wikipedia.org, but the same cautions apply when it comes to bias, superficiality, and misinformation. Of the many survey books on Buddhism I have read, the only one that I feel covers the whole spectrum of Buddhism fairly and with an adequate amount of depth is *Buddhism: Introducing the Buddhist Experience* by Donald W. Mitchell. Mitchell's book also has the virtue of providing short articles by practitioners of the different schools that are covered in the book so that one can get a sense of how the actual members of those schools understand their teachings and practices. My own attempt at providing an overview is available online at [nichirenscoffeehouse.net/Ryuei/Overview.html](http://nichirenscoffeehouse.net/Ryuei/Overview.html).

learn a basic Buddhist meditation practice at a local meditation center or introductory workshop or even a youtube video. For instance in this video [youtube.com/watch?v=95M7o8q8BAo](https://youtube.com/watch?v=95M7o8q8BAo) the American Soto Zen teacher Brad Warner provides instruction on Soto Zen practice. In this video [youtube.com/watch?v=CpabQrX\\_eKs](https://youtube.com/watch?v=CpabQrX_eKs) members of the Sōka Gakkai chant passages from the 2<sup>nd</sup> and 16<sup>th</sup> chapters of the *Lotus Sūtra* to teach other members of their group and interested people how to do their daily practice. There are countless videos like this on youtube providing instructions on various Buddhist practices. It is not the purpose of this article to recommend any particular practice so I will now move on having noted that I do think it is best if the study of the Dharma occurs in the context of some initial practice or at least attraction to actual practice, though in my own case reading about the Dharma did proceed the taking up of any actual practice.

For a person new to the Dharma I think it is best that they get a general overview of Buddhism. If they have taken up a practice they should learn about the particular lineage that the practice they have taken up comes from. That way they can get a sense of how the practice fits into the grand scheme of Buddhism over the ages and across the nations. For those who wish to practice Nichiren Buddhism, for instance, I will recommend that they read *Lotus Seeds* and/or *Awakening to the Lotus* that are available from the Nichiren Buddhist International Center's online bookstore at [nichiren-shu.org/books.html](http://nichiren-shu.org/books.html) in order to get this kind of general introduction to Buddhism and the Nichiren Shu lineage. When it comes to an overview of Buddhism as a whole, that can be a little tricky because inevitably the author of any overview will either be a Buddhist with their own sectarian bias, or a non-Buddhist who is writing as an outsider who may not have a

of merely reading about the Dharma instead of experiencing it personally through practice. Before putting forward a list of those translations and writings that I think a newcomer to the Dharma should examine I want to state that it is my conviction that Buddhist teachings are really only understood correctly if one keeps in mind that their purpose is for clarifying and encouraging practice not setting out creeds and dogmas or other abstractions. Conversely, I think Buddhist practice should be guided and clarified by learning what the Buddha actually taught in the sūtras. So while I do think it is necessary that a modern person in a non-Buddhist culture who wishes to learn about the Dharma needs to educate him or herself through reading about it, I also think that they will not really be able to learn about the Dharma as it really is unless they actually put down their books or walk away from their computer and actually meet practicing Buddhists and see for themselves what Buddhist practice is like. We should remember that the Buddha often told inquirers about his teachings that they should “come and see” (*ehi-passiko* in Pāli) for themselves. He did not tell them to just read his teachings in a book, or simply memorize them, or merely give intellectual assent to his opinions and views.

Now a person attracted to Buddhism in North America today is usually attracted to either a specific practice (such as some form of meditation like *zazen* or *vipassanā*) or to a certain way of cultivating positive emotions and a calmer and more compassionate outlook on life. I would certainly encourage people to take up, cultivate, and mature such practices; and I think that those who are already engaged in some kind of practice will have given themselves a more productive context for their study of the Dharma through books or online texts. Today it is relatively easy to encounter and

1916 by Pak Chungbin, called Sot'aesan, 1891-1943). Based on my own experience as an American seeker of the Dharma I can say that no written instructions, no matter how clear, are going to be enough to help people start their own practice. Perhaps in some cases, yes, but for many a healthy group of co-practitioners and an experienced teacher are essential for motivating inquirers to take up Buddhist practice and then to guide them into developing and maturing their practice. Here again the internet has replaced the Yellow Pages as the easiest way of locating local groups. For instance, one can go to meetup.com and simply search for Buddhist or meditation groups in one's local area and see where and when such groups are meeting. At this time there are also many Buddhist practice centers or temples in most major cities – though a majority of them are affiliated with either some form of Zen, or with one of the lineage of Tibetan Buddhism, or with practitioners of insight meditation (derived from the Theravāda practice of *vipassanā*). There are also temples established by various immigrant groups from East and SE Asia, though usually these are not the kinds of places that are sought out by those new to the Dharma, nor are such places usually set up to receive converts from outside their own ethnic groups. The problem, however, is that the new person may not realize that there are different types of Buddhism and they would certainly be unable to judge which groups are authentic and which are perhaps of more dubious origins. I remember that when I was in high school and college I certainly did not have the background to judge the legitimacy or credibility of any of the few Buddhist groups with practice centers or temples in Philadelphia.

I have given a lot of thought to how a person seeking the Dharma in North America today should proceed in order to avoid confusion and the dead-end

(including those that are disputed). Nevertheless, there is already so much available that it would take more than a single lifetime to read and come to terms with the Buddha's discourses that are already online, let alone all of the many commentaries by later Buddhist practitioners and scholars. I have no doubt that a person new to Buddhism would not even know where to start and reading many of the works available without suitable preparation would only leave the vast majority of people confused if not dismayed.

Reading the Buddha's discourses and the commentaries of later Buddhist scholar-monks does not and cannot replace actually putting Buddhism into practice and finding out for oneself whether it is of any help in overcoming suffering and bringing about the liberation of oneself and others. In order to put Buddhism into practice, a person seeking the Dharma must find a reliable teacher and community, or Sangha, so that they can learn face-to-face how to actually begin the practice of Buddhism. Looking back, I realize that the books I read in high school and college provided an abundance of instructions regarding Buddhist meditation practice. These books discussed both physical and mental posture. Yet for all that I was unable to bring myself to try these methods out. I was too unsure of myself and too undisciplined to try to follow the instructions in the books. When I finally was able to connect with practicing Buddhists I was able to finally begin my own practice. In my case, I learned how to recite the Lotus Sūtra and chant daimoku from the Sōka Gakkai who were proselytizing in the streets of Philadelphia, and when I left that group I was able to learn different methods of silent sitting meditation at the Philadelphia Shambhala Center (affiliated with the late Chōgyam Trungpa Rinpoche) and at the Won Buddhist Temple of Philadelphia (a Korean form of Buddhism established in

Research, was founded in Berkeley, California in 1986. Since that time they have embarked on a project to publish English translations of the Taishō Tripitika. This project is known as the BDK English Tripitika Series. They have already published close to 50 volumes of translations and more are in the works. These volumes can be ordered from their site here [bdkamerica.org/default.aspx?MPID=4](http://bdkamerica.org/default.aspx?MPID=4), though in addition to the print versions there are several translations that they have made available for free online at [bdkamerica.org/default.aspx?MPID=81](http://bdkamerica.org/default.aspx?MPID=81). I would also like to note that a full translation of the enormous and (in East Asia) very influential *Mahāyāna Nirvana Sūtra* is available at [nirvanasutra.net](http://nirvanasutra.net). It seems to be a slight revision by Tony Page of an earlier translation by Rev. Kosho Yamamoto. I cannot vouch for its reliability.

Due to the efforts of the Buddhist Publication Society, [accesstosight.org](http://accesstosight.org), the Bukkyo Dendo Kyokai, and many others, it has never been easier for English speakers to gain access to reliable (or at least readable) translations of the Pāli Canon and the most popular and influential of the Mahāyāna sūtras. Abhidharma treatises and many seminal Buddhist commentaries and essays are also available due to the efforts of these groups and other translators. There is still much work that needs to be done. As an English speaking Nichiren Shū priest I am often frustrated because many of the sūtras and commentaries that Nichiren referred to in his writings have not yet been translated, or at least not reliably. For instance the *Cultivation of the Mind Ground Sūtra* has not been translated into English, a full translation of T'ien-t'ai Chih-i's *Mo-Ho Chih-Kuan* has yet to be done, many other works of Chih-i have not been translated, and for that matter there is not yet a complete and reliable translation of all of Nichiren's writings

English translations of the Pāli Canon that are now available. The Pāli Text Society produced the first translations into English of the Pāli Canon beginning in 1895. Unfortunately, their translations were a pioneering effort by British civil servants for Western Buddhologists and are no longer suitable to modern non-specialists and those new to Buddhism. More recently Wisdom Publications has been publishing new translations of the Nikāyas or collections of discourses, most of them by or co-translated by Bhikkhu Bodhi (b. 1944), an American Theravada Buddhist monk and second president of the Buddhist Publication Society. These new translations are part of Wisdom's Teaching of the Buddha Series. This is a great advantage to someone seeking to read the Buddha's early discourses, as the new translations are much more accessible, provided with introductions and footnotes to help non-scholars, and most importantly they are translations by actual practitioners for actual Buddhist practitioners. The publications that compose this series can be found and ordered at [wisdompubs.org/Pages/c\\_teachings.lasso](http://wisdompubs.org/Pages/c_teachings.lasso). For those who may not be able to afford the considerable cost of ordering these books, English translations of large sections of the Pāli Canon (as well as many articles and commentaries by scholar-practitioners) can be found at [accesstoinsight.org](http://accesstoinsight.org). In some cases, this site even offers more than one translation of a single discourse. The American Theravada monk Bhikkhu Thanissaro (b. 1949) has done most of the translations found on that site.

As far as the East Asian Buddhist canon is concerned, the Bukkyo Dendo Kyokai (Society for the Promotion of Buddhism) that was established by Rev. Dr. Yehan Numata in 1965 has made a tremendous contribution. Its American affiliate, the Numata Center for Buddhist Translation and



university library. The internet is now the easiest way to find any book that is in print due to sites like amazon.com. Thomas Cleary's *Flower Ornament Scripture* and Edward Conze's translations of the *Perfection of Wisdom* or Burton Watson's translation of the *Vimalakīrti Sūtra* and many others are all easily ordered through amazon and other sites. Even used copies of those books that are out of print can be found via the internet. For instance, the partial translation of Chih-i's (538-597;) *Mo-Ho Chih-Kuan* by Neal Donner and Daniel Stevenson has long been out of print but used copies can be ordered. In fact, more and more people are no longer even ordering books and waiting until they are delivered in print form to their homes but simply downloading them to e-book readers such as the Amazon Kindle. For example, in less than a minute you can download *The Lotus Sūtra: A Contemporary Translation of Buddhist Classic* by Gene Reeves from amazon.com and read it on your Kindle. In many cases, one does not even need to pay to order or download a book. Many sūtras are available for free on various internet sites. A variety of translations can be found at the site simply called *Mahāyāna Buddhist Sūtras in English* at [www4.bayarea.net/~mtlee/](http://www4.bayarea.net/~mtlee/). I'd like to note that among the translations linked on that page can be found a number of translations of the *Heart Sūtra*, the *Diamond Sūtra*, the *Lotus Sūtra*, excerpts of the *Flower Garland Sūtra*, and even the *Nirvana Sūtra*. Unfortunately not all the links on that page are always up to date, but that is just one of many pages where one can find online translations of important sūtras.

If one wishes to read the foundational teachings of the Buddha common to all schools of Buddhism according to the earliest discourses of the historical Śākyamuni Buddha then at present the best place to start is with the many

was located in the headquarters building of the B.C.A. near Japan-town in San Francisco, and other hard to find books were on the shelves on the Shambhala bookstore in Berkeley. Of course back then, even if one could find a good translation of the Buddha's teachings in a specialty bookstore or by special ordering it or on the shelves of a university library, one might not understand what one was reading as these sūtras did not come with commentaries to help make sense of their context and doctrinal references. Looking back on that time, I now realize that I had access to a surprising amount of resources, but it was very difficult to get a handle on any of it as I did not yet have the background to put it all into a coherent perspective.

I will now fast forward to the present, the year 2012, and present how far things have come insofar as accessibility to the Buddha Dharma is concerned for a person new to Buddhism in North America who, for whatever reasons, decides to seek it out. In a way, things are so much easier because of the internet, but in another way there is such an overwhelming amount of information that can be accessed that it becomes even more difficult to discern what is reliable, what is not, and how to make sense of it all. I also want to discuss not just the accessibility to texts but also to groups of practicing Buddhists. After surveying the advantages and difficulties to be found by those presently searching for the Dharma I would like to offer my own suggestions for how a person new to Buddhism might sensibly go about discovering what Buddhism is and finding a healthy group to practice with.

A person who now wishes to find translations of the Buddha's discourses, whether those in the Pāli Canon or the Mahāyāna sūtras, is no longer limited to what may or may not be available in the local bookstore, or even the

Suzuki puts it: 'even now are more or less militaristic and do not mix well with other Buddhists'. (p. 176)

Despite their shortcomings, through those two books by Rahula and Conze I was able to get beyond the limited view of Buddhism presented by the popular books available on the shelves of the small bookstores of the 1980's. I came to understand that there was more to Buddhism than those forms of Japanese Zen that had so far appealed to the North American counter-cultures of the Beats and later the Hippies.

The university library, furthermore, gave me access to a complete translation of the *Hua-yen-ching* by Thomas Cleary (b. 1949), called in English the *Flower Ornament Scripture* as well as other works by Cleary and others about the Hua-yen teachings of East Asia. I was also able to find Conze's translations of the Perfection of Wisdom sūtras including the *Diamond Sūtra*, the *Heart Sūtra*, the *8,000 Line Perfection of Wisdom Sūtra*, and the *Large Perfection of Wisdom Sūtra*. At that time, I did not come across the translation of the Pāli Canon done by the Pāli Text Society back in the late 19<sup>th</sup> century, which is probably just as well for reasons I'll give below. In any case, even in the 1980's it was possible to find translations of the most important discourses of the Buddha contained in the Pāli Canon and the Mahāyāna if one had access to a university library and knew what to look for. I was fortunate in that in 1989, after graduating from college, I was able to visit San Francisco. There I was able to find many Buddhist translations and commentaries unavailable at the local bookstores in Philadelphia. In particular, I was able to find books in English on Pure Land Buddhism at the Buddhist Churches of America bookstore that at the time

about the Sōka Gakkai, Nichiren Buddhism, the *Lotus Sūtra*, and the practice of *daimoku*. If nothing else, the Sōka Gakkai made me aware of the fact that there was more to Buddhism, at least in Japan, than just Zen. In order to find out what the real story was I took a survey class on Asian religion. I remember that the texts for that class were *What the Buddha Taught* by Walpola Rahula (1907-1997), and *Buddhism: It's Essence and Development* by Edward Conze (1904-1979). The first book, written by a Theravāda monk, provided a survey of the foundational teachings common to all schools of Buddhism using many translated passages from the Pāli Canon. It helped that Walpola Rahula was also interested in showing how Mahāyāna teachings had roots in or were at least foreshadowed in the discourses of Śākyamuni Buddha as found in the Pāli texts. Edward Conze was not a member of any Buddhist school but he was a practitioner of meditation and a renowned (and so far unsurpassed) translator of the Prajñā-pāramitā sūtras. His book provided a broader and more comprehensive view of Buddhist history and teachings, though not untouched by his own biases and the limitations of Western Buddhist scholarship in the mid-20<sup>th</sup> century. For instance, of Nichiren Buddhism he wrote (citing D.T. Suzuki as well) :

It is customary to reckon the sect of Nichiren (1222-82) as one of the schools of Amidism. It would be more appropriate to count it among the offshoots of nationalistic Shintoism. Nichiren suffered from self-assertiveness and bad temper, and he manifested a degree of personal and tribal egotism which disqualify him as a Buddhist teacher. He not only convinced himself that he, personally, was mentioned in the *Lotus of the Good Law*, but also that the Japanese were the chosen race which would regenerate the world. The followers of the Nichiren sect, as

the Sōka Gakkai, and that was in Philadelphia when Sōka Gakkai International members still went out in the streets inviting people to come to their meetings that were being held in various homes or apartments. I do remember that at the time I was very surprised by how unlike Zen they were, because the impression I had gained from my readings at that time was that Japanese Buddhism was Zen Buddhism. This is an impression that I am sure was shared by almost all my contemporaries (assuming they gave any thought to Buddhism at all) and is probably shared by most North Americans today. In none of the books available to me at the time was there ever any discussion of the other schools of Japanese Buddhism such as Pure Land, Nichiren, Shingon, or Tendai. As far as Buddhism in other countries, there was even less information with the possible exception of Tibetan Buddhism as there were some books put out by the controversial Chögyam Trungpa Rinpoche (1939-1987) and some early works by the Dalai Lama. I do not remember hearing about or seeing books by Thich Nhat Hanh, the Vietnamese Zen monk, at that time, nor do I remember seeing anything about Chinese or Korean Buddhism while I was a high school student living in the suburbs. So to me, as for so many others, Buddhism was Zen Buddhism.

Opportunities to learn more about and experience more of Buddhism appeared in college, where I went to a Catholic university in Philadelphia, La Salle University. At that time I was still interested in Zen, though I had not found any Zen groups nor had I tried to do any sitting meditation though there were instructions in the books I had read. My interest was confined to reading *kōans* and stories about the past Zen masters as related by D.T. Suzuki, Alan Watts, or other popular writers. I had also become very curious